

絆 求 め て

3月 10日発行

文責 私学振興専門員 久保田学



「ごっこ遊び」について

さて、今回は11月27日の河邊先生の秋季公開講座での「創造的な学び」についてふれさせてもらいました。今回は、秋季公開講座で河邊先生がふれられた、「ごっこ遊び」についてまとめてみました。「幼児期の終わりまでに育てて欲しい10の姿」についてはご存じと思います。10の姿の多くは「非認知能力」です。この非認知能力について東京大学の遠藤利彦先生は以下のように述べています。

遠藤利彦 非認知能力には2つの力がある

- ①「自分に関する力」...自尊心、自己肯定感、自立心、自制心、自信
 - ②「人と関わる力」...協調性、共感する力、思いやり、社交性、道徳性←社会情緒的スキル
- ※非認知能力の反対は、認知能力=測ることのできる能力(知育教育)

そして、「ごっこ遊び」には、10の姿の要素があらわれています。それは、ごっこ遊びが、多くの経験を「総合的に味わえる遊び」であるからだと思います。以下にごっこ遊びの特徴についてまとめてみました。

(1)ごっこ遊びの年齢による変化と支援

年齢	段階	遊び内容(例)	保育での支援
3歳	○自分のイメージを保育者と楽しむ時期 ○見立てて遊ぶのが得意な時期	家庭生活を再現するままごと →砂場の砂をお団子やお結びに見立てる	・それぞれのやりたい事がしっかりと出来ることを優先する ・クラス全体で「イメージを共有する」ことが必要
4歳	○友だちの存在を感じながら遊ぶ時期 ○自分中心で、他との穏やかな共有	社会生活での情報が加わりテーマが広がる →警察、お城、お店、電車 ごっこ	・周りの友だちとつながる事で自分の遊びが更に楽しくなる
5歳	○周囲の人や物との関わりが育ち、それがごっこ遊びに反映する時期 ○穏やかな共有から、遊び方を自分と同じように共有したいと願う時期	お祭りごっこ、動物園ごっこ *何日も1つのテーマで継続的に取り組む	・クラス全体で遊びの「テーマ」を持てるようにする ・このテーマが子ども達の中から生まれてくるように「保育計画」を立てる事が重要

(2)ごっこ遊びの3つのポイント

…「もの」「場」「人間関係」を相互に関連させることが大切です

ポイント① 「もの」	何を準備するか。何を作れるようにするか
ポイント② 「場」	設定してある場の活用、環境を見立ててつくる場の活用
ポイント③ 「人との関わり」	他者の存在、仲間入りはしにくい、無理に仲間にしな

『ごっこ遊び(なりきり遊び)では、既にあるものを、他のものに見立てて活動する仕方から、「つくり見立て」(無いものを、実際に作り、遊びに活用する)への変化が大切。この変化は、遊びの深まりを示す』と河邊先生は話されました。つまり遊びの深まりの段階を意識し、子ども達の学びを支援することが重要ということです。そのためにも日々の保育の記録をしっかりと行い保育の振り返りを行うことが大切であると思います。今回は、「保育記録」についてふれたいと思います。(専門員)